坂本　篤史（神戸大学）

5 月 12 日(日)14:35－15:15　関西大学社会学部[第 3 学舎]　第二分科会会場

ヤコポ・ヴィニャーリとサンタ・マリア・ノヴェッラ修道院

本発表では、17 世紀フィレンツェ画壇、わけてもカルロ・ドルチの師匠として知られる画家ヤコポ・ヴィニャーリ(1592-1664)の画業再構築の一環として、様式分析や同時代史料に基づきながら、フィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ修道院のために制作された諸作品の帰属とその主題特定、解釈を行う。

Ｓ・Ｂ・バルトロッツィ(1753)によれば、ヴィニャーリは、この修道院のために祭壇画 1 枚、図書館に聖人像 4 枚、そのほか肖像画数点を制作したという。しかし、画家と修道院の関係を明示する美術作品の研究は、同聖具室を飾る《聖ドミニクスと聖フランチェスコ》、《聖ボナヴェントゥーラと聖トマス・アクィナス》を除いてほとんど行われていない。

本発表では、まずヴィニャーリと修道院の関係を取り結んだ仲介者として、白衣の聖ベネディクトゥス信心会に着目する。画家が 1614 年から所属していたこの信心会の拠点は、同修道院内の敷地内にあり、その精神的指導者であったドメニコ・ゴーリは、同修道院長を務めた人物であった。また、発表者がここで初めて指摘するように、修道院の注文に応えて画家が初めて制作した作品（消失）の支払いは、1619 年、つまりゴーリが修道院長を務めた時期に行われている。Ｇ・パリアルーロの推測によれば、その 2 年後に制作されたという上記 2 点の作品もこのゴーリの注文であったが、もしその推測が正しければ、当時ゴーリ主導で行われていたフランチェスコ会に対するドミニコ会の融和政策がこの作品に読み取れることもここで新たに指摘する。

次に、ヴィニャーリが修道院のために制作した諸作品、つまり通称福者の部屋に設置された肖像画と図書館に設置された作品を具体的に特定する。Ｇ・リーカ(1755)、Ｖ・フィネスキ(1790)は、福者の部屋にヴィニャーリの作品があったと明言してはいるものの、肖像画の像主については十分な記述を行っておらず、作品を同定することが不可能であった。一方、Ｆ・バルディヌッチは、フィレンツェ国立図書館所蔵の草稿メモにおいて、この点に関する貴重な証言を行っている。この古文書の存在についてはすでによく知られているが、その内容は今まで等閑に付されてきた。筆者はその記述と様式分析に基づいて、同修道院に保存されている作者不詳の《ジョヴァンニ・ダ・サレルノ》がこの部屋に飾られていたヴィニャーリの真筆作品であることを示す。一方図書館装飾に関しては、そこに飾られていたことがほぼ間違いない《ジョヴァンニ・ドミニチ》を基準作としながら、同修道院の年代記作者ラッファエーレ・バディイの記述に基づいて、今日「修道士の前に顕現する聖母子」というタイトルでサン・サルヴィ美術館収蔵庫に眠る作品が、図書館に飾られていたものであること、また作中の修道士が聖アルベルトゥス・マグヌスを表していることを新たに指摘する。